

拒む女―『伊勢日記』の虚構性について―

禿河 真樹子

伊勢は、小野小町とともに平安前期の女流歌人の代表であるが、現代においてその歌名は小町と比べてあまりにも低い。しかし、『古今集』には、小町を抜いて、二十二首を採歌され、古今集女流歌人の筆頭である。又その五十年後、伊勢の没後しばらくして編纂された『後撰集』や、紫式部・和泉式部・清少納言の活躍した時代に編纂された『拾遺集』においても、女性としても伊勢がもつとも多く採歌されているのである。伊勢の影響は、中古最高の文学作品とされる『源氏物語』にもつよく見てとれる。桐壺帝が、亡き更衣を偲んで明け暮れ「長恨歌の御絵」をご覧になる場面がある。この「長恨歌の御絵」こそは宇多天皇が、伊勢と貫之に詠ませた歌を賛として書き込ませたものである。又、空蟬の巻の末尾に見える「空蟬の葉におく露の木がくれてしのびしのびに濡るる袖かな」という歌は、その巻名ともなっているが、これも『伊勢集』所載の歌である。

『今昔物語』巻二十四には「延喜御屏風伊勢御息所、誦和歌語」として長い説話が見られるが、ここには終始歌人伊勢への称賛が記され、「サレバ御息所ナホメデタキ歌詠ミトナム語り伝ヘタルトヤ」と結ぶ。また『無名草子』にも「まことに名を得ていみじく心にくくあらまほしきためしは、伊勢の御息所ばかりの人はいかでか昔も今も侍らん」と伊勢の歌名は最大級に讃えられている。このように、伊勢のその歌は非常に高い評価を受けていたことがわかるのである。その伊勢の家集として『伊勢集』がある。五百弱の歌からなり、その冒頭三十首余の歌物語の態をなしている部分は伴信友により「伊勢日記」と称され、伊勢の半生が歌と詞書で綴られている。宇多天皇に入内した藤原基経女温子に仕える女房伊勢が、温子の兄弟である仲平のかりそめの愛を受け、やがて失恋。失意のうちに大和に退くが、主人温子の薦めで再び出仕し、宇多帝の寵を受け皇子

をなす。その皇子と離れ、なおも宮仕えを続けるうちに宇多帝は讓位、落飾し、仁和寺に隠棲することとなり、皇子も早逝する。温子と伊勢はその悲しみを歌に託しなくさめ合う。以上が「伊勢日記」部分の内容であり、それが第三者の目を介して、かつ自照的に描きあげられている。「伊勢集」は、伊勢について知る最も有用な資料の一つであるが、その冒頭部分「伊勢日記」は歌物語の原型ともいわれ、多分に物語的であり、そのすべてを事実とはとらえがたいものである。本稿では「伊勢日記」の物語的作為・虚構の例を挙げて周辺を明らかにしつつ考察していくこととする。

『伊勢集』は、同一の祖本から生じた諸本が三系統（西本願寺・群書類従本・歌仙家集本 それぞれ一・二・三類本と称すこととする）あり、そのうち最古の書写である。西本願寺本が祖本の形を比較的良好に伝えているとする見解が支持を得ており、本稿でもこの西本願寺本を底本とすることにす。本分引用の際には、原則的に西本願寺本を、明らかな誤写を改めつつ引用することにす。その中でも、注記の混入と思われる箇所等、他系統を用いたほうがより祖本に近いと思われるところもあるので、随時他の二系統本も用いてゆく。

「伊勢日記」は、温子の弟である仲平との恋の破綻から物語は始まり、その失恋の痛手乗り越えて宮中に仕える伊勢が今度は言い寄る男たちには目もくれず、一心に温子に忠節を尽くすことが語られている。再び言い寄ってくる仲平然り、温子や仲平の兄である時平然りであるが、それら主要人物以外にも伊勢に言い寄りながらもそでにされ続ける男たちが登場している。

また人数とも思はぬに心ざし深き人ぞそめて言ひける。

文おこすれど返りごともせねば

⑯山がつか言へどもかゝるもなかりけりこひこそそらに

われこたへせよ

猶かへりごともせざりければ、「否ともいかにとも、

わが君」とせむれば

⑰いかにせん言い放たれずうきものは身を心とも

せぬよなりけり

とばかりいひてやみにけり。

これを、この一類本にそつて解釈してゆくならば、恋人の数にも数えない男の求愛をずっと無視しつつ、男の「古今集」恋一（四八八）の「わが恋はむなしき空にみちぬらし思いやれどもゆく方もなし」をふまえた訴えにも、一向にかえりみようとほしない。男はなおも訴え続け、やつのことで返事がくる。しかし、それは、取り付く島もない

ようなものだったのである。この⑩の歌であるが、三類本をみると（第一句「いなせとも」）、その詞書には「：男文をこそれど、返りごともしせざりければ」とあり、男からの歌であるのとれる。幾度手紙を送っても、女からの返事は一向にこない、そこで男はたまらず哀願する。「いやだとも、いいともあなたからはつきりしたお言葉をいただけないままでおります。諦めなければならぬ事と知りながら、つらいことに、我が身ひとつも思いのままになりません。」となるのだが、ここはやはり伊勢の歌とりたい。『後撰集』恋五（九八三）に、

おやの守りける女を、「いなせとも言ひ放て」と申し
ければ 伊勢

いなせとも言ひ放たれず憂きものは身を心とも
せぬ世なりけり

とある。この詞書を信じるならば、「伊勢日記」冒頭に「親いと愛しうして、男などもあはせざりけるを」（三類本）とあるように、まだ伊勢が親元に守られていた少女の頃に、男に言い寄られたときの歌ということになる。歌意も、「親が私を厳しく守っておりますので、つらいことですが、我と我が身のままにはなりません。」となる。『伊勢集』の作者は、この伊勢の歌にある、相手の思いを歯牙にもかけず、するりとかわす態度を、物語のこの文脈の中に取り

込んだのではないだろうか。そして物語のなかでは、男も伊勢のすげない返事にととう諦めがついたのである。男との交流はここで終わるのである。これまでの、返事すらしなく黙殺の態度と並んで、最後の「とばかりいひてやみにけり」という、冷たく切り離すような物言いによって、伊勢の接近してくる男に対する強固な拒絶の姿勢を、一層鮮明にしている。

かくいふほどに騒ぎいできて、兵衛のすけなる人解かれて、但馬の介のなりにけり。「近くてはさもおぼえでやみにしを、かくとほく流されたるがあらはれなること」といひたるかへりごとと

⑩ かけて言へば涙の河の水脈はやみ心づからや
または流れむ

「かくいふほどに騒ぎいできて」は二類本「かかる時の大臣ながされ給ふ」三類本「かくて世にさわぎいできて、大臣もながされ給ひける」とあり、そこに明らかかなように菅原道真の配流事件のことである。藤原時平側が作成した宣言には「右大臣菅原朝臣、寒門より俄に大臣に上りて止足の分を知らず、専権の心あり。佞諂の情を以て前上皇の御意を欺惑す。詞は順にして心は逆、これ天下の知るところなり。」とある。これが藤原氏側の立場からする発言であっても、当時異例の出世をした菅原道真に対し、「止足の

分を」知れ、分際をわきまえろという声があつたことは、天下の知るところであつたようである。道真が右大臣に叙せられたのは昌泰二年（八九九）のことであるが、その翌年には、三善清行に大臣辞任を勧められている。そして昌泰四年（九〇一）の正月二五日、道真は、太宰権帥として左遷されることになる。失脚の直接の理由とされたのは、道真が醍醐帝を廃し、女嬪の齊世親王を擁立せんと企て、上皇の同意をも得たということであつたが、これが事実であつたかどうかは定かではない。この、道真の左遷に伴つて「兵衛のすけなる人」も任を解かれて但馬の介になつたのである。一類本にはその関係については何も記されていないが、二類本には、「むこにて兵衛佐よりたちまの介になされてながされけるを」、三類本「むこにて兵衛佐よりたちまの介にその人もながされにけり」とあり、この男が道真の女嬪であつたと明らかにしている。道真が太宰府に流されるに伴いその子息たちは、長男の大学頭高規は土佐介に、式部丞景行は駿河権介に、右衛門尉景茂は飛騨権掾に、文章特業生淳茂は播磨へとそれぞれ流されていった。女嬪の方は、宇多天皇、宇多皇子齊世親王以外は必ずしもはつきりしないが、伴信友の『表章伊勢日記附証』が考証するところによると、『政事要略』に所載の昌泰四年正月廿七日の左降除目に「但馬権守源敏相左兵衛佐」

とある。また、秋山虔氏は皇胤紹運録に敏相は醍醐皇子源允明を生んだ兵衛御息所の父ということになつてゐることを紹介されてゐる。敏相が道真の女嬪であつたという記録は見えないが、疑うべき根拠もなく、ここでは特に問題にしない。しかしここで、一つの不自然がある。はやくは染谷進氏まき、関根慶子氏よしかが指摘されてゐるとおりこの道真配流にかかわる記事がここにおかれてゐることは事実から離れるのである。道真の事件は、宇多天皇退位から四年たつた昌泰四年のことである。「伊勢日記」にはこの後に、伊勢が在任中の宇多天皇の寵を得て皇子をなす記事、「帝おりさせたまひて二年といふに」とある昌泰二年の記事がある。この時間的矛盾が、「伊勢日記」の他作説の有力な根拠の一つになつてゐるのである。片桐氏かたぎりは、この「かけていへば」の歌が『中院本後撰集』に他作として収められてゐることを指摘されてゐる。

文などおこせける男、但馬の国にまかりけるを、伊勢がとひにおこせければ、

藤原さねただが妹

かけていづる涙の川の水はやみ心づからや今はなかれむこれによれば、但馬に流された男と関係があつたのは「さねただが妹」であつて、伊勢はこの女性を慰めたのでありこの歌はその見舞いに対する彼女の答えということになる。

そこで氏は、「伊勢日記」の作者が、伊勢の手に残っていた歌反古を利用して物語に仕立てていったのではないかと想定されている。つまり、この段は、作者の構想に沿って創作されたのではないかといわれている。また、ここに描かれる伊勢の姿について秋山氏は以下のように説明されている。「注意すべきは、ここに女から男への同情の歌があげられているのではなく、ただ『あはれなることといひたるかへりごと』とだけある点である。(中略)すなはち女は男に対して、はからずもおのずから優越的な立場に立ち、そこから相手を同情してやるという態度なのであって、そのような女の態度は歌に託するにも及ばぬという体であると考えられよう。にもかかわらず男の方からは、かくも深沈たる哀訴の歌が寄せられるというところに、おのずから女の姿勢の、酷薄なまでに、驕慢なまでに、男・女のつながりの次元を越えた屹立が語られているといえよう。ここでの伊勢は、これまでの仲平、時平のように相手に氣を持たせたり、反論しやり込めることもなく、ただ黙殺しつづけるのである。それは伊勢の屹立として、容赦ないままでに冷たく、すきのない態度をこの段で明確に示しているのである。

三

平貞文に関わる段も、前記章段と同一線上に語られていく。

同じ女年来言ふともなく言はずともなき男ありけり、
返りごともせざりければ、「年経にけるを、などか見
つとだにのたまはぬ」とはべりければ、この女「みつ」

となむ、名をばつたりける。たちかへり、男

⑭ たちかへりふみゆかざらば浜千鳥跡見つとだに

君言はましや

かへし

⑮ 年経ぬることおもはずば浜千鳥ふみとめてだに

見べきものは

夏いとあつきさかりに、おなじ男

⑯ 夏の日の燃ゆるわが身のわびしさに水こひ鳥の

音をのみぞなく

かへりごとなし

ここでは相手の男について明記されていないが、『平中物語』第二段によつてこの男が、「平中」こと平貞文であることが知られるのである。

また、この男の、懲りずまに、いひみいはずみある人ぞありける。それぞ、かれを憎しとは思ひはてぬものから、返りごともせざりければ、「この、奉る文を見たまふものならば、たまはずとも、ただ『みつ』とばかりのたまへ」とぞいひやりける。

男やる

夏の日に燃ゆるわが身のわびしさにみつにひとりの
音をのみぞなく

また、返りごと

いたずらにたまる涙の水しあらばこれして消てとて
見すべきものを

かういひかわしつづ、ほどは経ぬれど、あふことは
いとかたうぞありければ、

この貞文については、『古今集』の二三八に

寛平御時、藏人所のおのこども、さが野に花みんとて
まかりたりけるとき、かへるとてみなうたよみたりけ

るついでによめる

平さだふん

花にあかでなにかへるらんをみなへしおほかるのべに
ねなまし物を

とあり、また二七六には、

仁和寺にきくの花めしける時にうたそへてたてまつれ
とおほせられければよみたてまつりける

秋をおきて時こそ有りけれ菊の花うつろふからに

色のまされば

とある。この二首について、松原輝美氏は、前の歌を宇多
天皇の盛時に、貞文が帝に近侍していた頃の歌とし、後の
歌は、仁和寺に御遷御になった帝の落飾の後も親しく拝眉

して、帝のなのお醐醒帝の御後見としてあられる御稜威を賀
したものと説明されている。このように、貞文が宇多天皇
に近しくお仕えしていたのであれば、伊勢と交渉を持つ機
会も自然多くなるものである。「伊勢日記」本文にそつ
て、伊勢と、平貞文との交渉を見てみると、さきの「心ざ
しふかき人」が「そみて言ひける」のとは異なり、この今
度の男は、「いふともなくいはずともなく、何年も求愛
してくるにしては態度の曖昧な、伊勢にしてみれば扱いつ
らい男であった。この男に対しても、伊勢は黙殺の態度で
応ずる。男は「せめて、私の手紙を見たただけでもお返事
ください」といつてきたので、伊勢は男に「みつ」とい
うあだ名を付けた、と一類本を読むかぎりでは解釈できるの
だが、二類本、三類本を見ると事情が変わってくる。二類
本「などかみつどもの給はぬ、といへりければ、ただみつ
とのみぞいへりける。それより此女をみつとぞつけたりけ
る」、三類本「などかみつとだにのたまはぬといひければ、
みつとぞいひたりける。それより、この女をみつとぞつけ
たりける」とあり、「みつ」とあだ名を付けられたのは女
の方であることになっている。㊦の男からの歌の中にある
「水こひ鳥」が「水を欲しがる鳥」と「『みつ』を欲しが
る鳥」の意を掛けているとれば、「水こひ鳥」とは男の
ことをさし、「みつ」と呼ばれているのは女であることに

なる。また、「水恋鳥が鳴くように、「みつ（水）」とおつしやるあなたを求めて、ひとり泣いております」（秋山氏口語訳）とすれば、これはどちらにしても差し支えない。松原氏は、「せめて『みつ』とだけでも懇願する男に對して、女はただ、その願いのままに『みつ』とだけ言つてやった。その上に、男の懇願のその言葉をそのままに名として男にかぶせて、笑いのめしてやる。そういう一類本の、男に對する軽いあしらいを述べるほうが、『年頃』の求愛に對しても、一顧の『返りごともせ』ずに黙殺してきた男に對する処遇としてより適わしいのではないか。」といわれる。たしかに『平中物語』においても女にあしられ、嘲弄される色好みとして描かれている彼である、『平中物語』と「伊勢日記」とを同じく考えるのは問題ではあるが、『平中物語』によつて好色人平中の定評があつたとするなら、「伊勢日記」の作者もその上で、この段において、徹底的な三枚目役として平中を登場させることは充分考えうる。それでは、『平中物語』の方が『伊勢集』よりもさきに成立していることになるが、そのことについて片桐氏は冒頭の書き出しに触れて説明されている。つまり、『平中物語』には、「おなじ男」（第三段）、「また、このおなじ男」（第四段・第一〇段・第一四段・第二二段）、「このおなじ男」（第二二段）などと「おなじ男」で始ま

る用例が多いことから、『伊勢集』の「また、おなじ女」という書き出しを見ると『平中物語』を意識してこの『伊勢集』がつくられているのではないかと、いわれるのである。

「たちかへり」と「年経ぬる」の贈答は『平中物語』には見えない。ただ一言ではあつても、やつと女から返事をもらつて、平中は、この機を逃すまじとすぐさま歌を贈つてくる。それに対する伊勢の返歌であるが、これには二通りに解釈の違いがある。一つには、「長年私のことを思つてくださったからこそ、お手紙を手元にとどめて拝見したのですわ」あなたの熱意に免じて、とりあえず手紙を見るだけは見た、ということである。秋山氏はこの解釈にたつて、いかにも恩着せがましい、そして、相手に決して心を開いていないのである、といわれる。そしてもう一つには、「何年もの間、お手紙をいただいていることを思わなければ、手紙をとどめておいて、それに返事を書いてあなたにお見せしたりするでしょうか。」（片桐氏口語訳）長年あなたからお手紙をいただいていたからこそ、「みつ」と返事したのであつて、そうでなければ返事などしませんでした、と言っているのと取ることである。どちらも、返事をしたからといって、あなたを受け入れるということでは決してないのですよ、という基本の意味においては同じで

あるが、この時の伊勢の姿勢にははっきりと違いがあるのである。前者の取り方をするのであれば、暗に心を開いていないことを示すにとどまる。しかし、後者は、「心ざしふかき」とも思われぬ、しかし好機に乗って言い寄ってこようとする男へのあからさまな拒絶である。この段の最後の言葉「かへりごとなし」はこの前の段でもたびたび出てきた、伊勢のもつとも辛辣な拒否の意思表示なのである。前段とあわせてこの章段を伊勢の頑ななまでに男を排する姿勢を描いているとするならば、㊸の歌意も後者のほうがより相応しいのではないかと思うのである。

ところで、片桐氏の口語訳中の下線部「それに書いて」というのは、伊勢が平中に「みつ」と返事を書いて遣ったその返事は、当時往々にあつたように、相手の手紙の余白に書いたのであろうと氏は解されている。平中の綿々たる手紙の余白に、ただ「みつ」とだけ書いて送り返す、そのことに伊勢の男に対する冷徹さ、もしくは揶揄の姿態が見えるのだが、これよりもっと平中のこの呼び掛けに対して、かれを嘲弄したおんなのことが描かれている記事が『今昔物語』巻三十にある。平中が、本院の大臣（時平）の家の若い女房で、侍従の君という人に年頃言葉を尽くせぬ程に言い寄っていた。しかし、

侍従消息ノ返事ヲダニ不為ケレバ、平中嘆キ侘テ、消

息ヲ書テ遣タリケルニ、「只『見ツ』ト許ノ二文字ヲダニ見セ給へ」

といつてよこしたところ、

其ノ返事ヲ急ギ取テ見ケレバ、我ガ消息ニ「『見ツ』ト許ノ二文字ヲダニ見セ給へ」ト書テ遣リタリケル、其ノ「見ツ」ト言フ二文字ヲ破テ、薄様ニ押付テ遣タル也ケリ。

と、徹底的に軽んじられているのである。「伊勢日記」や『平中物語』にあるところのものと同話であるが、ここでは、平中の相手は侍従の君となっており、伊勢の名前は消えている。いったいどちらが、事実であるのか。『伊勢集』のなかに散在する伊勢と平中との贈歌を見ても、伊勢である可能性は低くないが、断定に及ぶほどの根拠もなく、疑問の残るところであるが、今は本文を追ってゆくしかない。

伊勢にびしやりとはねつけられた平中であつたが、また懲りずに文をよこすのである。一、三類本では返事をせず黙殺した、と書かれているが、二類本では、

夏のいと暑き日盛りに、おなじ人

㊸夏の日に燃ゆる思いのわびしきはみつにひかりの音をのみぞなく

返し

②いたづらにたまる涙の水ならばこれして消てと

言はましものを

とあり、多少の語の違ひはあるにせよ、その構成においては『平中物語』そのままである。『平中物語』においてはこれに続けて更に初冬の頃まで季節の推移のなかに二人の交渉が語られており、その中に折り込まれる十首の歌のうち五首が『伊勢集』のなかに散在している。この二類本の②の歌は後人の増補である、というのが定説となっており、ここはやはり「かへりごとなし」として、伊勢の拒絶を強く表しているのと取るほうが、これまでの「伊勢日記」の文脈に添うように思うのである。

この、女からどこまでも擲揄され、翻弄される平中は、「伊勢日記」における男のありようそのものである。秋山氏は、「『伊勢日記』における伊勢は、歌という言葉によって男と直対し、そのことによって拒否的な自己の姿勢に生きたといえよう」と結論づけておられるのだが、それはあくまで「伊勢日記」における上での伊勢の姿である。これまで述べてきたように、この章段は虚構からなっているのである。「伊勢日記」の作者の構想に沿った虚構。この作者の構想について片桐氏は、群がりよってくる男たちを拒否し尽くすことによって、宇田帝の寵を得るに至ったというところが、この物語的部分の主題であり、そのための虚

構であると説明される。また「この部分は、伊勢を毅然とした女性として意図的に描いている。本当は、もっと弱くやさしい女だったようであるが、物語のヒロインとしての彼女は特にこのように描かれなければならないのであ

る。」といわれる。それに加えて、彼女も才氣あふれる官廷女房である。打てば響くような手応えのある応酬にその目を輝かせたに違いない。それを証明する歌は数限りないほどに残っているのである。そんな才女の伊勢から、稀に垣間見れる弱さや、にじみでる優しさが彼女の魅力となつて男たちを惹きつけたのではないだろうか。「伊勢日記」に描かれるような驕慢とも言える鉄の女であつては、人間の魅力に乏しく、その後、宇田帝から寵を得ることもなかったのではないか、とすら思えるのである。それは言いすぎだとしても、「伊勢日記」部分以外に見える時平との贈答や、その他『伊勢集』に収められている優しく艶な歌の数々を見たとき、秋山氏の言われるように、男を徹底的に打ちのめすことが、わが自立の証とするような女ではないように思うのである。

四

以上のように、伊勢の頑なに冷徹に男を拒否する姿勢は物語としての文脈―他の男に心を動かさず、一心にお仕えす

るうちに帝の寵を得るに至った―に沿う、作為による演出
ということが出来る。つまり、「伊勢日記」の作者にとつ
て「帝の寵を得る」ということが最高の榮譽であり、幸福
であつて、それがこの物語の主題となつているのである。
であるから、宇田帝の落飾後には温子との交流が語られる
にとどまり、伊勢の娘中務の父である敦慶親王の登場がな
いのだといえはしないだろうか。尊貴の人の寵が、伊勢に
真実幸福と喜びをもたらしたものであるか疑問の残るとこ
ろであるが、それについてはまた稿を改めることとする。

注一 秋山虔「伊勢日記解」（『王朝女流文学の形成』

昭和四二・三）

注二 染谷進「伊勢集の歌物語について」（『槻の木』

昭和一三・九〜一二）

注三 関根慶子「伊勢集の冒頭歌物語と後続歌集との成立

関係―歌集から歌物語へ―」（『文学・語学』昭和
三四・九）

注四 片桐洋一「『伊勢集』物語的部分の性格」（『中古

文学』昭和五二・五）

注五 注一に同じ。

注六 松原輝美「伊勢日記私注（四）―心ざし深き人―」

（『高松短大 研究紀要』昭和六三・三）

注七 注六に同じ。

注八 片桐洋一「伊勢」（昭和六〇・八 新典社）

注九 注四、および注八に同じ。